

# Moje West Chronicle

～京都ミュージックシーンの系譜～

<http://www.m21.or.jp/clubfame/mojoproject/>

## phase 27 陰陽①

### ライヴハウスオーナーであり、 ミュージシャンであり、滝マニア

「ぜひこのコーナーで紹介してくださいね」。熱心に薦めてくれたのは「RAD」の藤田景子さんだった。熱井には理由がある。同店の店主・山崎ゴロ一氏は「RAD」のご出身。ミュージシャンでもあり、これまでの当コーナーとは少々勝手が異なる。

ロッキーマウンテンに1カ月間滞在され、帰国された直後に取材を受けていた。海外のアーティストと交渉してきたというのではない。滝と闘っていたと言う。「ライヴハウスと同じくらい滝巡りが好きで、ロッキーマンにはものすごく滝があるの。金と時間はかかるけど、日本の滝はもうほとんど行っちゃったから。今回は389mの高さの滝で、水が落ちてくる真下の壁に落ちてきたという。そんな大瀑布である。滝登りに落ちてもしたら確実に命に關わる。「危ないですよ(笑)。岩が一掃に落ちてくる可能性もあるわけで、日本だと慎重に立入禁止とか柵とかありますけど、向こうでは「open access」とか書いてあっても、「この先に行くなら自分の命は自分で守ってね」という感じなんです。滝の真下まで行けるんです。ものすごく怖いけど(笑)」。滝の魅力とは？「それはもう、一に水量、二に水量、だからでかかないとダメですね。美しいとか、紅葉が綺麗とかではなく、圧倒的なパワーを感じたいんです。だから100m単位の滝でないと満足できない。流れが雷崩のようにスローモーションで落ちてくるのを見て、ドキドキキッとして、どこまで近づけるか」。

滝巡りを始めたのはここ15、16年。元々は小学校の修学旅行で日光に行ったことに通る。アウトドアが好きな先生が、行く先が滝ばかりだった。「ウルトラマンの怪獣が山から出てくるシーンがあるじゃないですか。そのシーンと滝がシンクロしたんですね。怪獣と同じスケール感、大きいものが「動いている」パワーにインパクトを受けた。そうこうしているうちに音楽にドップリになり、滝の存在すら忘れてしまっていた。「RAD」時代に「あまりにも働きすぎだったので温泉にも行きたくなくなつてね。で、たまたま滝の看板を見つけて思い出したんですよ。「あ、オレ滝が好きやった」と(笑)。今なら車もある。子供の頃より金もある。それから狂ったように滝を巡った。同店のオーナーになってからは2週間や3週間の旅をするようになった。地元観光局や大使館から資料を集め、現地でも情報を収集する。

### バンドの初ステージは小学生の頃 卒業式も体育館でライヴだった

その旅の様子を想像するに、何となく過去に当コーナーで紹介した「富士オデッセイ」の頃の人々の思考がラップする。東洋に神秘的な何かを感じ、欧米からオリエンタルに意識が向いた時代。そのプリミティブな行動原理に、何となく似ている。それは誰もが持っていてしかるべきものなのだろうが、特に音楽に携わる者には大切なのではないかと思うのだ。

62年生まれの山崎氏の出身は東京世田谷。中学3年生まで通った。小学校6年生から中学1年生で既にバンドを組んでいたという。音楽に関してはかなり早熟である。山崎少年には得がたい友人がいた。そもそもバンドを組んだ、いや組めたのはその友人がいたからだった。「ませた友人はつかりで、その中に金持ちがひとりいて、家にエレキギターからドラムセットから全部あるんですよ。家郎のガレージで練習してました(笑)。友人はドラム担当、「ライヴもやってましたね」。小学生がライヴ？「学校の体育館とか。何せPTAが後ろについてましたから(笑)」。その友人の母上が「マネージャーみたいなもの」だったらしい。「小学校の教室を借りてオヤツ付きのコンサートとか(笑)」。小学校の卒業式も体育館でコンサートだった。「気持ち悪いでしょ？(笑)」。全員で合唱ではない。卒業式の壇上に5、6人だけである。特別扱いも甚だしい。そう、山崎氏はステージの下でも裏でもなく、上に立つ人だったのである。別々の中学になったメンバーもいたが、それでも続けたバンドも程なく解散せざるを得なくなる。「理由は声変わり(笑)。ポールやジョンの声が出なくなつた(笑)」。ビートルズのコピーバンドを組む、何とませた子供たちであったことか。だがその魅力的な友人たちと仲良くしたいために、必至でギターの練習をした。少年の純粋さは、驚くべき早さで上達を生んだことだろう。時に75、76年。時代的には、プリティッシュロックが下火になり、「ゴッド」らのグラムロックが台頭してくる頃だ。とは言え小学生が、入学しての中学生である。日本の歌謡曲に興味を示しそうなものである。それこそ歌謡曲全盛の時代。「73年に五木ひろしの『夜空』がレコード大賞を獲って、74年が森進一の『機嫌時』。75年は布施明の『シクラメンのかほり』だったかな。その頃は一番日本の歌謡曲が面白い時代だった。西城秀樹・郷ひろみ・野口五郎の御三家が全盛期。沢田研二に麻丘めぐみ」。あの頃はまだ演歌と歌謡曲の区別がなかったんですよ。今は森進一と言えは演歌と思われれるけど、「機嫌時」なんかはポップやし、五木ひろしもそう。野口五郎にしろ、デビューは演歌と呼べるものだし、あまり枠組みがなかったんですよ。

### 東京から大阪へ。機材環境よりも 人のレベルが違いすぎて宅録の日々

大阪に居を移してから、バンドは続けようとしたが、レベルの低さに愕然として「一緒に組めるヤツがいなかった」。結局高校の3年間もバンドとは無縁の生活になった。なまじ極端に恵まれた環境にいたための不幸と呼ぶべきか。結局、3つ下の弟氏とふたりで腕を磨いた。「僕がギターを教えたんやけど、



弟の方がものすごく上手くなってしまっていて、仕方なくヘースに転向(笑)。  
 難々としながら、延々とふたりで多重録音の日々。多重録音といってもラジカ  
 セを二台並べて、カセットテープでオーバードビングを繰り返す原始的なもので  
 ある。「ドラムなんかないから、その辺にある箱を叩いたり、シンバルがない  
 からノコギリを叩いたり(笑)。何かを表現しようとはしてましたね。あの  
 ころMTTRがあったら最高に楽しかったでしょうね。」

その頃、77年から78年あたり、弟氏と聴いていたのは「ビートルズを卒業し  
 て、普通にティーン・ポップ、パール、レッド・ツェッペリンに行っただけで、そこからキ  
 ング・クリムゾンに行っただけで、イエス、ジェネシス」といったバンドだった。  
 「ジェネシスはビーター・ガブリエルがヴォーカルだった頃、フィル・コリン  
 ズになってから世界的に有名になったけど、その前、僕らに言わせるとフィ  
 ル・コリンズなんかジェネシスじゃないんですよ。あんなもんなアメリカを意識  
 した単なるポップスですから。当時のイギリスのプログレッシヴ・ロックのバ  
 ンドがこぞってアメリカを意識して進出を狙って、面白くなかったんです。  
 音がキレイになって、コーラスとシンセサイザーがばりばりになってね。それ  
 よりも前のプリティッシュのゴリゴリなサウンドが好きでした。ポヘミア  
 ン・ラブソティは良いけど、長髪を切った髪をはやしたフレディ・マーキュ  
 ーもクインじゃない。今、我々がこれらのバンドの代表曲として知っている  
 楽曲は、全て「面白くなってきたから曲」ということになると思う。80年  
 代に入ってしまったともっと悲惨である。「デュラン・デュラン、カルチャー・  
 クラブ、ワム? もうダメですね。その頃が音楽界の世代は可哀相(笑)。  
 MTVとかが流行って、ヴィジュアルが重視されてきた頃ね。全然面白くない。」

興味も時代もジャズ・フュージョンへ  
 「かねてつおかけさまブラザーズ」参加

ハブルで浮かれた時代と言うには少し前、掴み所のない、どうにも中途半端  
 な時代だった82年に大学進学で京都へ来た頃には、全くロックを聴かなくなっ  
 ていた。「ジャズ、フュージョンにドップリ」、プログレッシヴ・ロックという  
 テクニックに特化したサウンドを聴くと、やはりそこへ行く、大学時代はジャ  
 ズとフュージョン、そしてルーソフ、ほいブラック・コンテンポラリー、「パテ  
 イ・オースチン、ランディ・クロフフォード、クルセイダース、クインシー・ジ  
 ヨーンズ・オーケストラ」、やっぱりちょっとジャズが入ってる感じがすね。  
 デイヴィッド・ワーウィック、ミニ・リパートンとか、懐かしい。ディスコを  
 熱狂させたアース・ウィンド&ファイヤ、クール&ザ・キャングといった流  
 行のソウルも「バンドマン」としてディスコで演奏しましたよ。「マハラジャ」  
 とかで、「暇ですけどね。大学生の頃にそういうのをやりながら、既にヘ  
 ースでメシ食おうと思ってましたから。大谷大学に在籍した頃、少し上の世  
 代で、京都産業大学出身の「イタチ(後のトップス)」や、「ジャマイカ」「アフ  
 リカ」といった大人気で、ホーンセクションとかがある京都のバンドには影響  
 を受けた。「ローザ・ルクセンブルグのどんと同じ世代です。『どんと』とい  
 う変なヤツが京都をウロウロしてる。』っていう話をしましたから。大学で  
 も軽音楽部でオリジナル曲をつくり、「あとは「ヘースを弾きたい」ってあち  
 こちに貼り紙をしまくって、話きたら取りあえず行って「ああ、こんなお  
 もろない」って言うて帰ってくる(笑)。そして「かねてつおかけさまブラザ  
 ーズ」というバンドに参加。「京都を中心に活動してたコミックバンドで、東  
 の「爆風(スランプ)」西の「かねてつ」って言われましたね。だから爆風ス  
 ランプとか聖鬼魔!とかハービー・ポイスとか、あの辺とは仕事しましたよ。  
 「子キンジョーシ」「バナナホール」「バーボンハウス」、京都は動員数や音質を

考えて「肉のBAG」に絞ってましたね。常連でした。ちなみに、今でこそイ  
 ンディーズレーベルという言葉は当たり前、むしろ主流のように言われるが、  
 当時は「自主制作」という言葉を使っていた。「そうそう、自主制作の第一号で  
 すからね。世間で取り沙汰された最初のバンドがその「かねてつおかけさまブ  
 ラザーズ」だったんですよ。つくったシングル盤のレコードが、日本で初めて  
 だっけ言われましたよ。報道番組で取り上げられましたから。自主制作やイン  
 ディーズという言葉の黎明は、筋肉少女帯や有頂天らの「ナゴムレコード」で  
 ある。それよりも前の話であるから、インディーズレーベルの正しい定義も  
 定かではないし、正確なところは解らないが、日本第一号であったのかもしれ  
 ない。86年までは、全くもってミュージシャンの側の人なのである。「RAG」  
 が北山の「LIVE SPOT RAG」だった頃に、そこでバイトしながらバンドしてま  
 したから。ここでようやく接点が生まれる。

「LIVE SPOT RAG」VS激走とバトル  
 言「つお」聞「つお」はよかったです(笑)

81年に「LIVE SPOT RAG」がオープンし、その初期からスタッフとして働い  
 た。後に木屋町に移転し「LIVE SPOT RAG」となる。その初代店長が山崎氏だ。  
 京都のライブハウスを追いかけるといふ当コナーとしては、ようやくここか  
 らが本筋だと言っている。「須田社長と大喧嘩して(北山時代の「LIVE SPOT」を)  
 辞めたんですけど(笑)。「二度と来るな!」「おう、二度と来るか!」って  
 (笑)。「立場が下の人間を踏み台にするより、立場が上の人間に噛みついて方が  
 いいと思っていた。だからこの店を通った時には戸惑いましたよ。噛みつかれ  
 る側になったのに、噛みつくヤツがないぞ」と。後にこういう感想を抱くこ  
 とになるのだが、それは少し後の話だ。

ともあれ、辞める辞めないの大喧嘩の理由はこんな様子だった。「お互いに溜  
 まった部分もあるやうけど、キツカケは下らないことですね。良く覚えて  
 ますが、京女のパーティが何かが入って、当時は須田さんを「ラグのマス  
 ター」で「ラグマス」って呼んでいて、「この日は正装をして来い」と言われ  
 んです。正装っていう意味が今ひとつピンとこなかったから、普段着で行っ  
 たら「帰れ!」みたいな(笑)。それが84年とか85年とか、そもそもバイトし  
 ようと思っただ理由が、京都で一番ジャズで有名な連中が集まってる店だったか  
 ら、そいつらと仲良くなりたかったことだったんですよ。「ナニワエキスプ  
 レス」の連中、東原力哉さんとか、清水興さんとかとも仲良くなったし、大学  
 の軽音楽部長もやっていたから、追い出しコンパのゲストに力哉さんと呼んで  
 意気なつたりしてね。今から思えばそんな世話になってるんやから、もうちょ  
 つと聞いたら良かったのにね(笑)。」



to be continued...

政治で  
 わたしは  
 変われない。

**LIVE & SAKE 陰陽(ネガポジ)**  
 京都市中京区間之町通竹屋町下ル 森ビルB1F  
 075-252-8856  
 営業時間はライブにより不定。要問い合わせ  
<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/negaposi/>

05 8.8 郵政民営化関連法案が参院本会議で否決。これを受けて小泉純一郎首相が衆議院の解散を決断。臨時閣議で解散・総選挙を決定。投票は9月11日。  
 05 8.24 雑誌のコーナーでスカウトされた小笠原朋美(19)をリーダー・Voを務めるユニット「ハレンチ☆パンチ」が「白線～スタートライン～」でデビュー。決め言葉は「嘘をつくこと。ずるいこと。いい加減なことはハレンチなこと!ハレンチは嫌い。ハレンチ☆パンチ!」